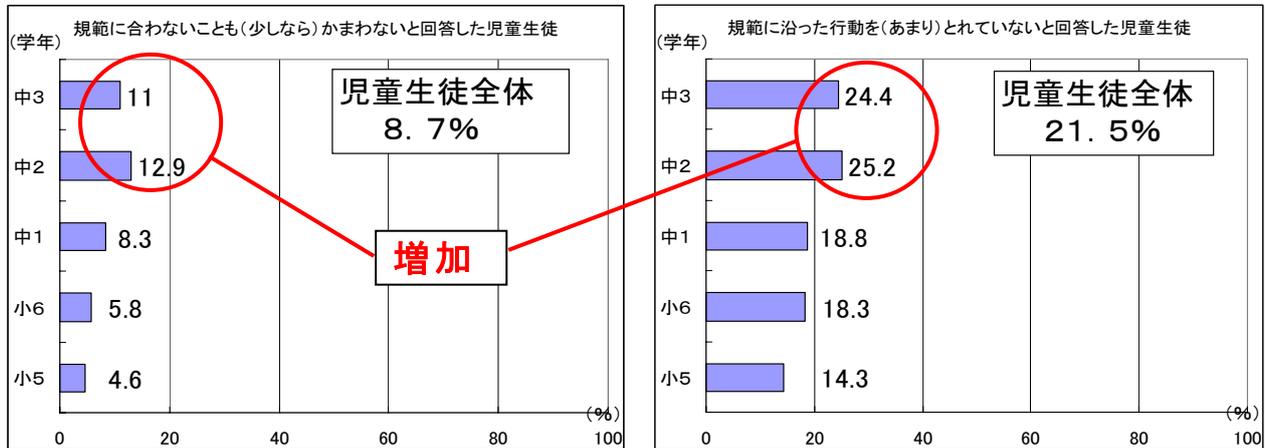


# 児童生徒の規範意識を醸成する調査研究 アンケート結果の分析と考察

## I. 児童生徒のアンケート結果から

### 1. 規範を守る行動ができていないと、規範を守ろうとする意識があるかへの回答

行動に関する項目と意識に関する項目を総合した平均のグラフ



#### 分析1 —規範を守ろうとする意識そのものが低い児童生徒は平均で約9%いる—

児童生徒の90%以上は規範を守ろうとする意識がある。80%近くは規範を守る行動もできている。

「規範を守ろうとする意識そのものが低い」児童生徒は9%、「規範を守る行動ができない」児童生徒は22%である。

#### 考察1 —規範を守ろうとする意識そのものが低い児童生徒の意識を高めるために、規範を守ろうとする大多数の児童生徒の力を活用したい—

大多数の児童生徒は、規範を守ろうとする意識があり、守る行動もできている。児童生徒相互の影響力は大きいことを考えると、この大多数の児童生徒の考え方や態度を活用して、規範意識を高めていくことが効果的ではないかと考える。

#### 分析2 —中学校1年生から2年生にかけて規範意識が低下する—

中学1年生の7月までは、小学校と大きな変化はない。

中学校2年生の7月では規範を守ろうとする意識・規範を守る行動ともに、全学年の中で最も低下した。

#### 考察2 —中1から中2に重点を定め、この時期の規範意識低下を防ぎたい—

規範意識の低下が始まる中学校1年生に対して、重点的に規範意識醸成のための取組を行うことが効果的であると考えられる。

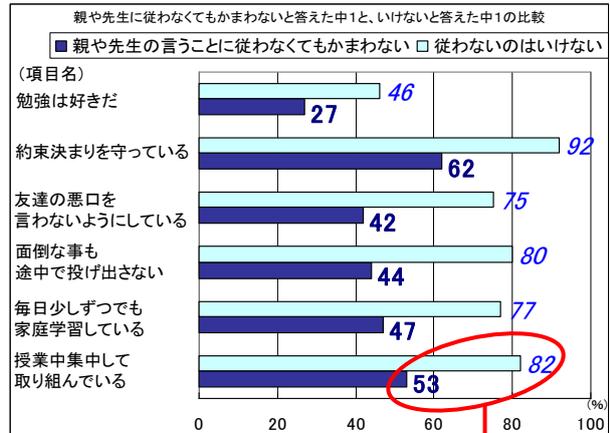
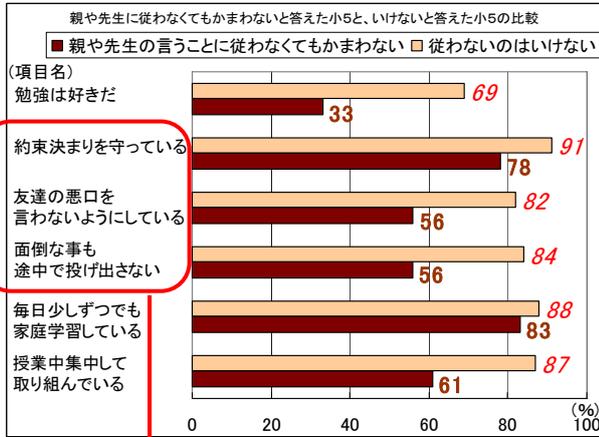
### 2. 規範を守る行動と規範意識への回答の関連性、及び学習意欲との関連性

規範意識の高低から見た規範を守る行動の高低、及び学習意欲との関連

※ ここに取り上げたグラフは一例であり、多くの項目が同様の傾向を示した。

例1 「親や先生の言うことに従わなくてもかまわない」と回答した児童生徒と「従わなくてははいけない」と回答した児童生徒（小5・中1）の比較

**規範を守ろうとする意識についての項目**



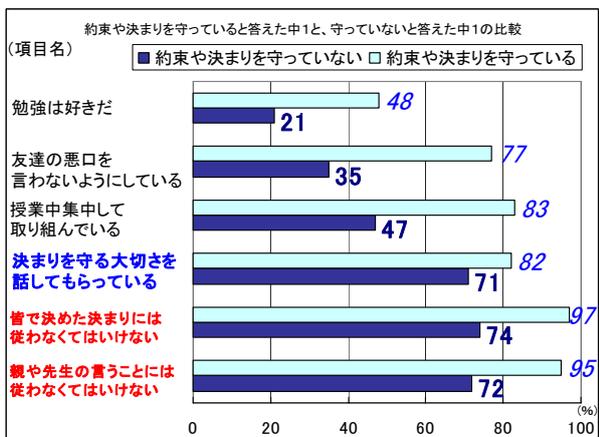
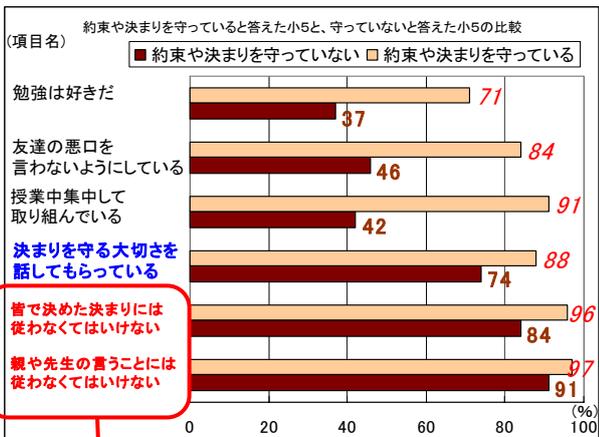
**規範を守る行動についての項目**

このように差が見られる

規範を守る行動の高低から見た規範意識の高低、及び学習意欲との関連

例2 「約束や決まりを守っていない」と回答した児童生徒と「守っている」と回答した児童生徒の比較

**規範を守る行動についての項目**



**規範を守ろうとする意識についての項目**

分析3 — 規範を守ろうとする意識と守る行動は関連があり、学習意欲にも影響している —

規範を守ろうとする意識が低い児童生徒は、規範を守る行動もできていない。  
 規範を守る行動ができていない児童生徒は、規範を守ろうとする意識が低い。  
 これらの児童生徒は、勉強への意欲や授業中の取組への意欲が低い。

考察3 — 規範意識の醸成は、学習意欲の向上にもつながることをアピールしたい —

「確かな学力」を身に付けさせるためにも、学習指導と同時に、規範意識を醸成する指導を充実させることが効果的であると考え。

### 3. 規範を守る行動と規範を守ろうとする意識についての学年別の傾向

分析5 — 友達の悪口を言うこと、授業中におしゃべりすること、親や先生の言うことに従わないことなどには「いけないことだ」という気持ちが薄い—

「毎日家の仕事を手伝っていない」児童生徒は平均して約45%で、最も「できていない」という回答が多かった。以下順に「心をこめて（丁寧に）学校や家の掃除をしていない」が約36%、「友達と意見が違った時に、自分の考えをうまく相手に伝えられない」が約34%、「友達の悪口を言ってしまう」が約27%であった。

「友達同士でゲームセンターに行くのはかまわない」児童生徒は平均して約36%で、最も「かまわない」という回答が多かった。以下順に「授業中におしゃべりや騒いだりしてもかまわない」が約16%、「髪の毛を染めて登校してもかまわない」が約11%、「親や先生の言うことに従わなくてもかまわない」が約10%であった。

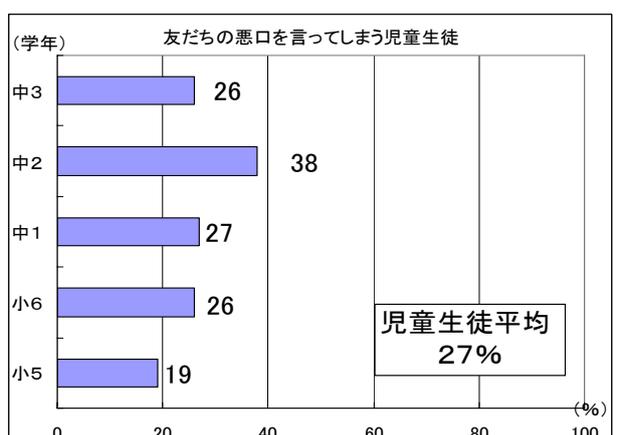
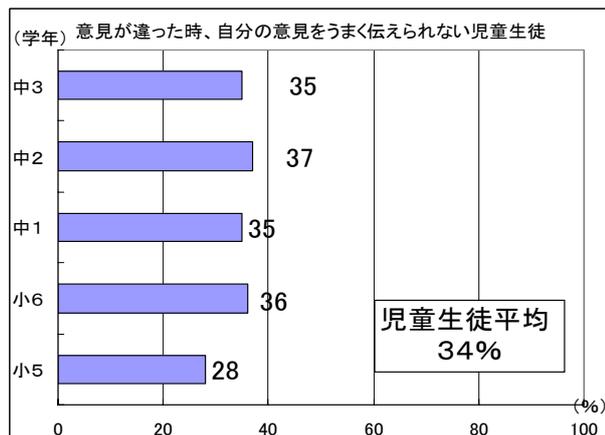
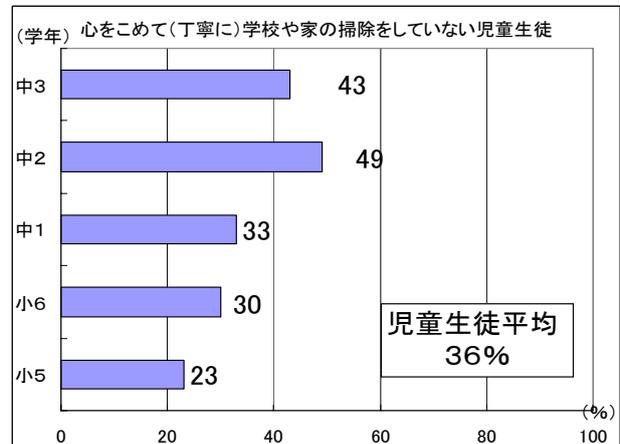
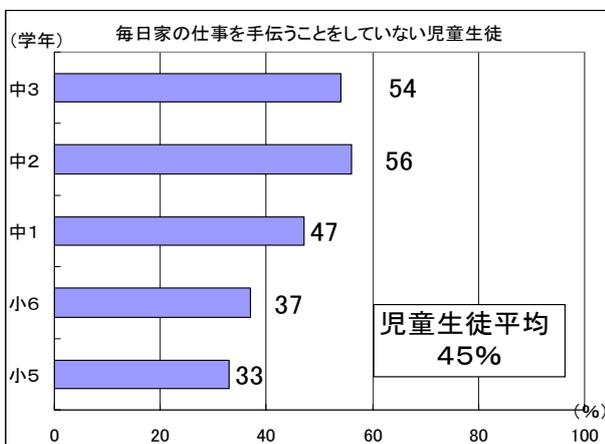
考察5 — 「友達の悪口」「授業中のおしゃべり」「親や先生に従わない」のはいけないことだ、を徹底したい—

「友達の悪口を言ってしまう」ことや「授業中におしゃべりをしたり騒いだりするのはかまわない」ことについても、してはいけないという意識が薄い児童生徒がいる。

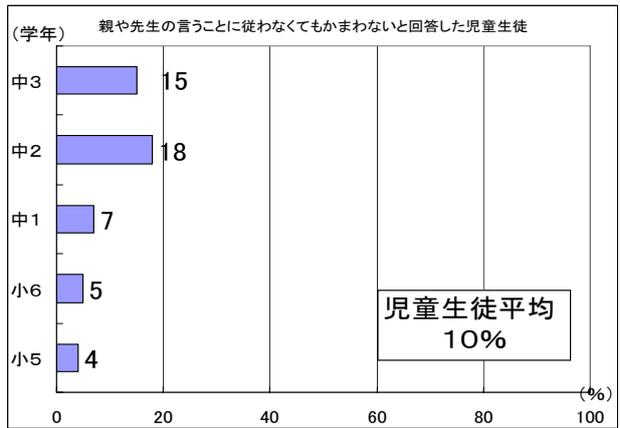
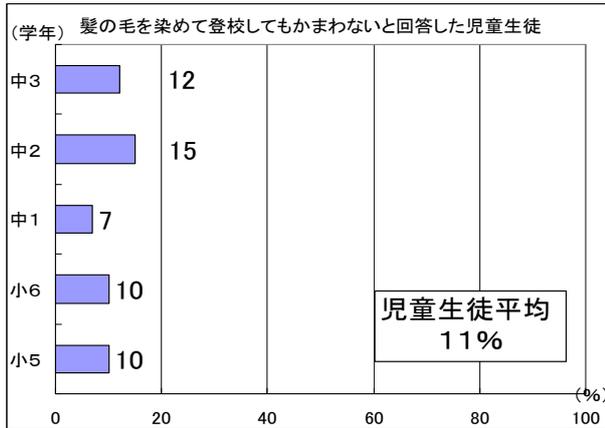
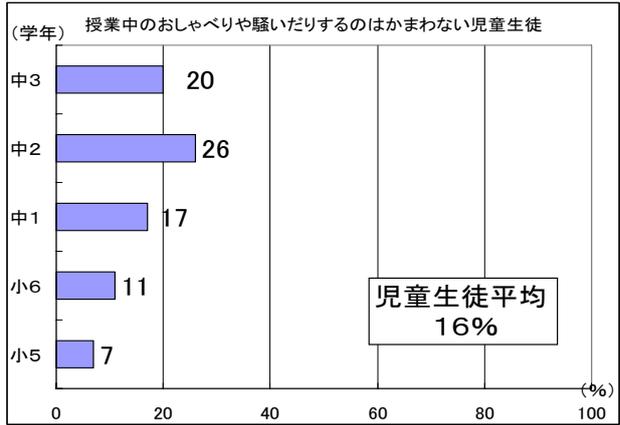
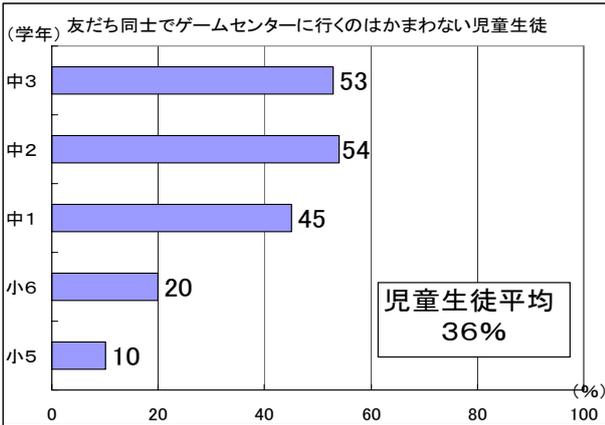
「親や先生の言うことに従わなくてもかまわない」と回答した児童生徒は中1までは4～7%程度だが、中2・中3では15%～18%に上昇する。

ここに取り上げられた項目を重点事項として、それがいけないことだ、という指導を徹底することが効果的ではないかと考える。

#### 規範を守る行動についての結果（「できていないこと」上位4位まで）

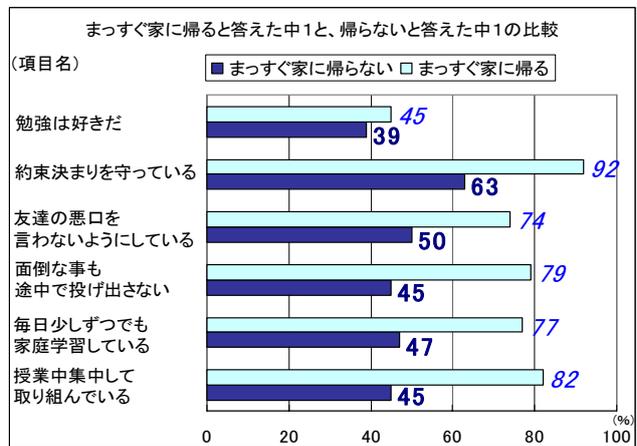
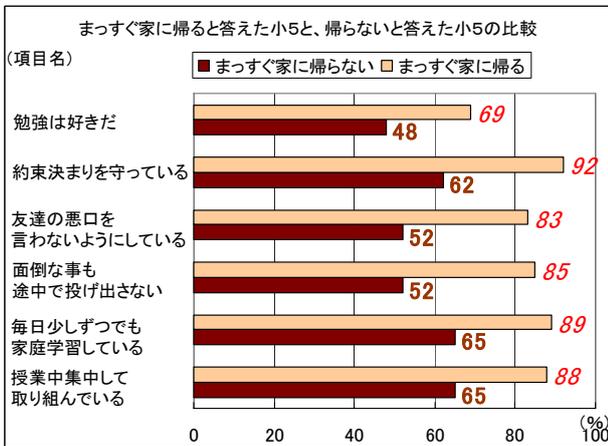


**規範を守ろうとする意識についての結果(「かまわないこと」上位4位まで)**



**4. 学校・家庭・勉強への適応感と規範を守る行動・意識との関連性**

**「まっすぐ家に帰る児童生徒とそうではない児童生徒」の比較**



**分析 6 —まっすぐ家に帰る児童生徒は、規範意識が高い—**

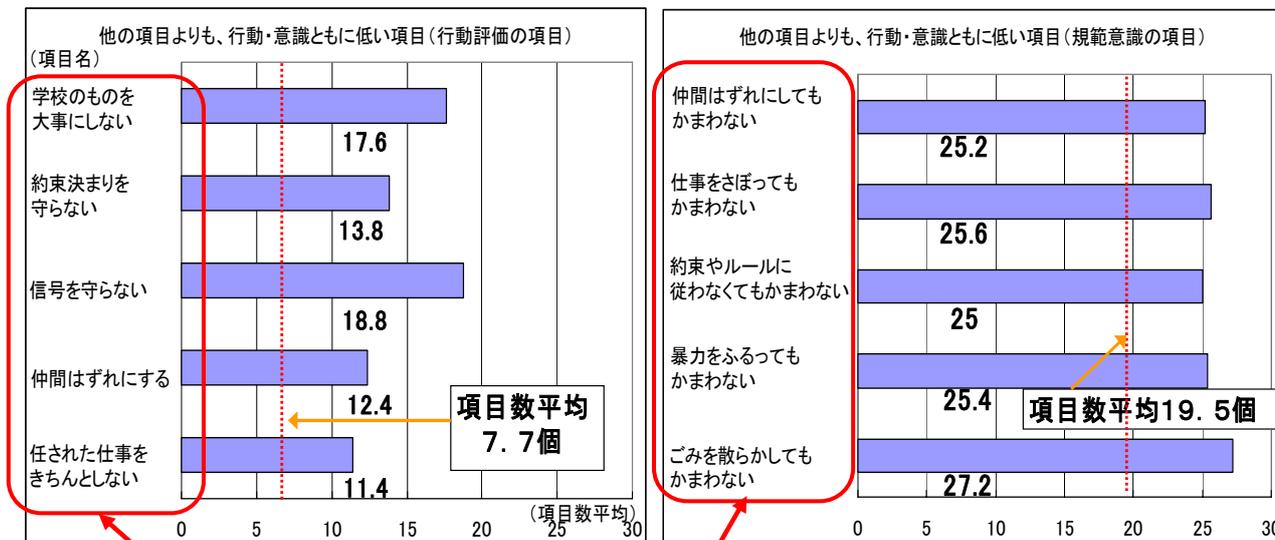
「まっすぐ家に帰る児童生徒とそうではない児童生徒」については、「まっすぐ帰らない児童生徒」の方が、行動評価、学習意欲ともに低く、規範意識もやや低い。

**考察 6 —保護者との連携で、まっすぐ家に帰る子どもを育てたい—**

「まっすぐ家に帰る」というあたりまえの行動が、規範意識の醸成に関係する。学校安全の観点からも、まっすぐ家に帰すことは重要であるが、教員の指導だけでは難しい。保護者に呼びかけ、「まっすぐ家に帰るといふ、あたりまえの行動を促すことが、規範意識醸成につながる」ことを理解してもらい、同一歩調で指導していきたい。

## 5. 他の項目と大きな違いが認められる個別項目

※ 意味のあるデータとするため、極端に度数が少ない項目（「たばこを吸ったり酒を飲んでもかまわない」や「万引きをしてもかまわない」など）は除外した。



ここに表れた項目が他の項目と違いの見られた項目

### 分析 7 — 規範を守ろうとする行動や意識の中心は「公共心」と「責任感」 —

「学校のものを大事にしない」「信号を守らない」「ごみを散らかしてもかまわない」（「**公共心**」に関する項目）と回答した児童生徒は、規範を守る行動ができず、規範を守ろうとする意識も低かった。

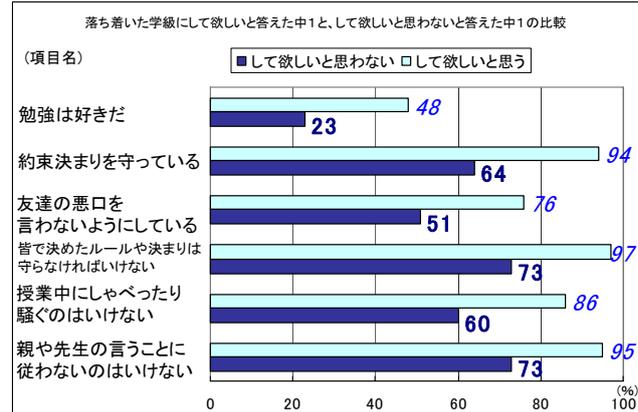
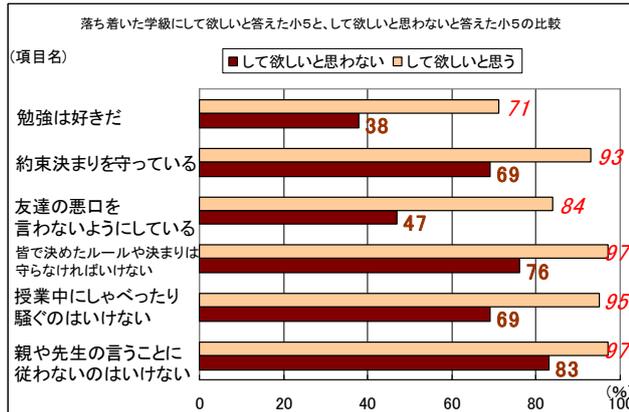
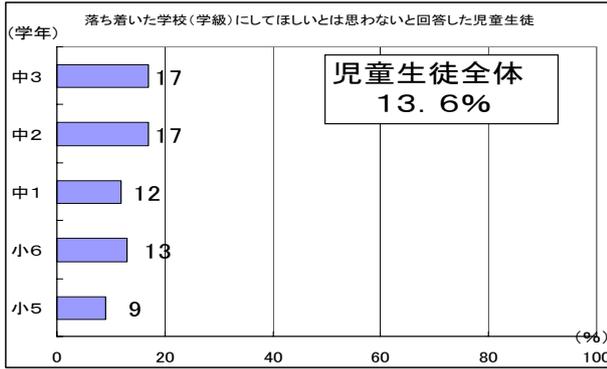
「任された仕事をきちんとしない」「仕事や役割をさぼってもかまわない」（「**責任感**」に関する項目）と回答した児童生徒も、規範を守る行動ができず、規範を守ろうとする意識が低かった。

「悪口を言う」「仲間はずれをしてしまうし、してもかまわない」児童生徒は「**人間関係能力（コミュニケーション能力）**」に課題があると考えられるが、このように回答した児童生徒の行動や意識も低かった。

### 考察 7 — 規範意識醸成のために、以下の3つを重点として指導したい —

- ① 「公共心（学校のものを大事にする、信号を守る、ごみを散らかさない）」を育てる
- ② 「責任感（面倒でもやり抜く、仕事や役割はさぼらずきちんと果たす）」を育てる
- ③ 「コミュニケーション能力（あいさつをする、悪口を言わない、仲間はずれにしない）」を育てる

## 6. 児童生徒の学校への要望



### 分析 8 — 落ち着いた学校(学級)を望まない児童生徒は、規範意識が低い—

大多数の児童生徒は「落ち着いた学級(学校)」を望んでいる。

逆に「落ち着いた学級(学校)」を望まないと回答した児童生徒は、そうでない児童生徒に比較して、規範を守る行動ができず、規範を守ろうとする意識も低い。

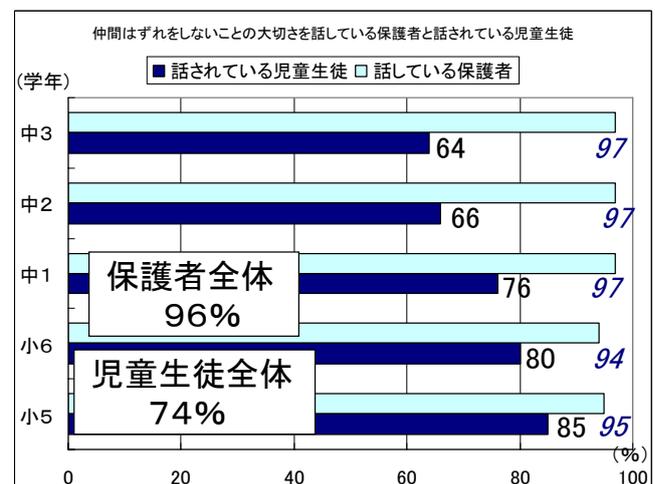
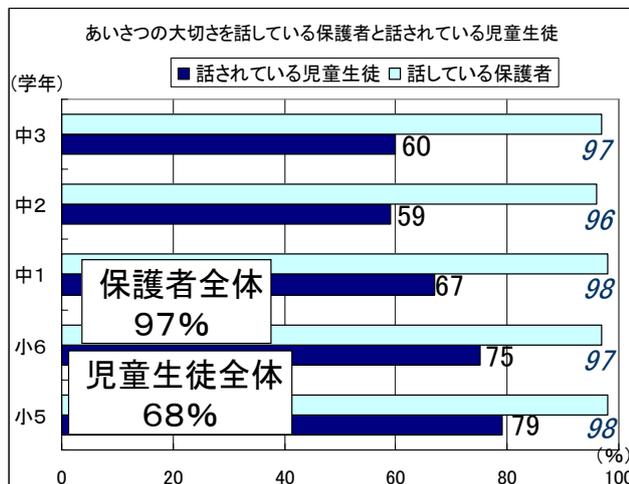
### 考察 8 — 落ち着いた学校(学級)を望む子どもを90%以上に増やしたい—

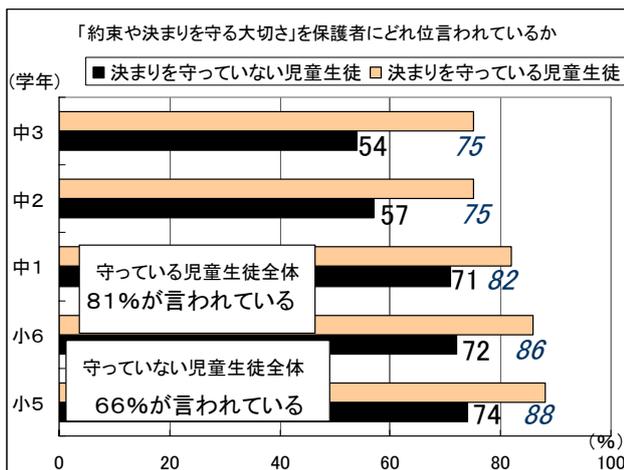
落ち着いた学級(学校)を望まないと回答した児童生徒は、課題を抱えていることが明らかになった。このように感じる児童生徒を減らし、落ち着いた学校(学級)作りを推進することが、規範意識を醸成するためには重要であると考えます。

## II. 児童生徒と保護者のアンケートを重ね合わせた結果から

※ ここでは、児童生徒のアンケートと保護者のアンケートを重ね合わせて分析した。

### 1. 児童生徒と保護者の受け止め方の違い





**分析 9 —親が子どもに「決まりを守ることの大切さ」などをきちんと伝えることは、規範意識を醸成するために大きな効果がある。ただし、「あいさつの大切さ」などのように、伝えたつもりでも子どもに伝わっていないことがある—**

児童生徒と保護者の回答に最も開きがあったのは「あいさつをすることの大切さ」であり、約 97% の保護者が「人にあった時、あいさつすることの大切さを話している」と回答したのに対し、「話してもらっている」と回答した児童生徒は約 68% であった。伝えたつもりでも、実際には伝わっていないということが浮かび上がってくる。

「約束や決まりを守っている」児童生徒の約 81% が「約束や決まりを守る大切さ」を保護者に言われていると回答しているが、「守っていない」児童生徒の約 66% が言われていないと回答した。

また、「話してもらっている」と回答する割合は学年とともに低下し、中学 2 年・3 年で一段と低下する。

**考察 9 —親が子どもにきちんと伝えることが重要であることを、アピールしていきたい。それと同時に「子どもに伝わる伝え方」を考える機会を設けたい—**

親が子どもにきちんと伝えて、子どもが「親に言われている」と認識すれば、規範意識は高まると考えられる。

ポイントとなるのは、子どもが「言われている」と認識することである。伝えたつもりでも、実際には伝わっていないことがあるので、「子どもにどう伝えたらよいか」を考えて、伝え方を工夫することが大切ではないか。

### Ⅲ. 保護者のアンケート結果から

#### 1. 学校への要望

**分析 10 —子どもの話を聞いて。分かるように話してやって。そして、落ち着いた学校（学級）にして。保護者の願いは児童生徒と同じ—**

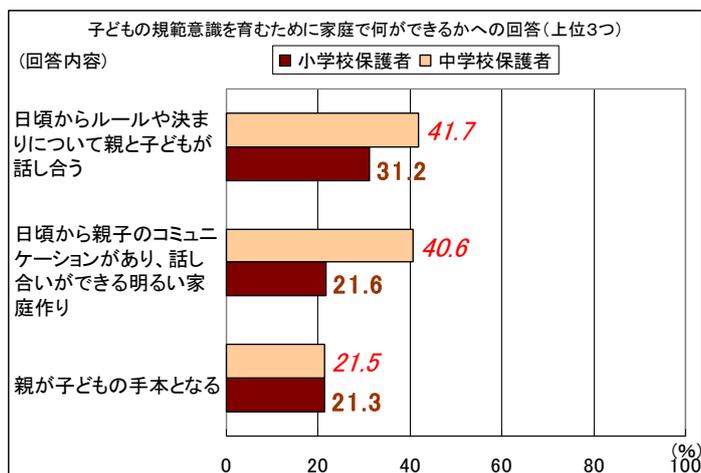
上記 3 項目については特に要望が強く、99% 以上の保護者が要望した。

**考察 10 —注意する時は子どもの話を聞いて。分かるように話して。そして、落ち着いた学校（学級）にして欲しい。この保護者と児童生徒の願いに応えたい—**

## 2. 子どもたちの規範意識や行動を育むために家庭で何ができるか

※ この項目について、保護者3020人中1639人(約54%)が記述式の回答を寄せた。以下の%は、記述式回答者数を分母としている。

保護者の記述式設問への回答数	小学校	中学校	総数
家庭で何ができるか	680	959	1639
学校・家庭・地域が連携して何ができるか	524	884	1408



**分析 1 1 —規範意識を醸成するには、日頃から親子でルールについて話し合うことと親子のコミュニケーションをとることが大切(保護者の主な意見) —**

「子どもとルールについて話し合うことが大切」という趣旨の内容を回答した保護者は、小学校で約31%、中学校で約42%であり、最も多かった。

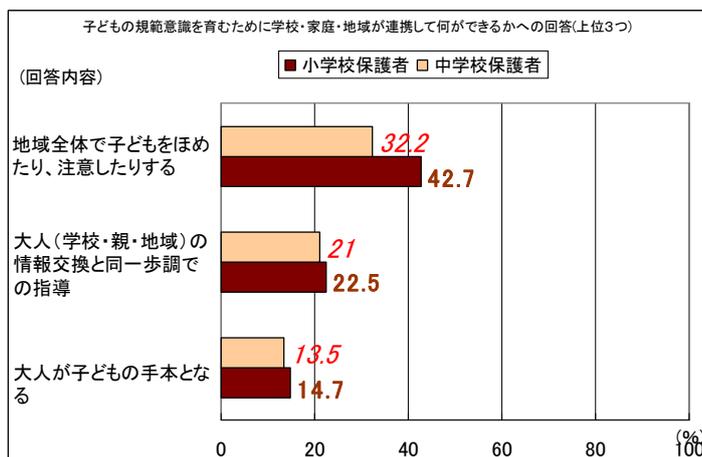
次に多かったのは「日ごろからの親子のコミュニケーションがあり、話し合いができる明るい家庭作りが大切」で、小学校で約22%、中学校で約41%であった。

また、保護者から例えば「学校の約束を書いて貼っておく」とか「ルールや決まりを楽しく覚えられる『カルタ』などを作る」などの具体的な意見が寄せられた。

**考察 1 1 —こうした保護者の考えや具体的な提案を紹介して、活性化を図りたい—**

保護者からこのように建設的で具体的な意見が寄せられた。これらの意見を保護者の方に紹介して考えていただくことが、規範意識を育む取組を活性化するのではないか。

## 3. 子どもたちの規範意識や行動を育むために学校・家庭・地域が連携して何ができるか



**分析 1 2 —規範意識を醸成するには、家庭や地域で子どもをほめたり、注意したりすること、大人同士が情報交換をすることが大切（保護者の主な意見）—**

「学校だけでなく家庭や地域全体で子どもをほめたり、注意したりすることが大切」と回答した保護者は、小学校で約 43%、中学校で約 32%であり、最も多かった。

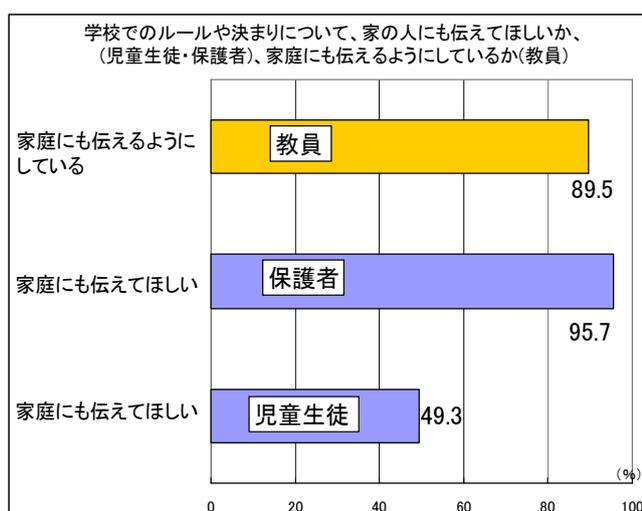
次に多かったのは「大人同士の情報交換の必要性とそれに基づく同一步調での指導」で、小学校で約 23%、中学校で約 21%であった。

**考察 1 2 —連携をするために、情報交換や話し合いをする場を積極的に設けたい—**

家庭や地域で子どもをほめたり、注意したりする大切さを指摘する意見が多かった。ただ、「そのような声かけの大切さは分かっているが、実際には、よく知らない子どもには声をかけにくい」という戸惑いの声も多かった。

具体的に家庭や地域の連携を深めていくためには、こういうことを話し合ったり、情報交換をしたりする場を設けることが求められていると考える。

#### IV. 児童生徒・保護者・教員のアンケートを重ね合わせた結果から



**分析 1 3 —半数の児童生徒が学校のルールや決まりを家の人に伝えて欲しくないが、保護者はほぼ全員が伝えて欲しいと思っている—**

90%の教員は「学校のルールや決まりを家庭にも伝えている」と回答し、児童生徒の半分は「伝えて欲しくない」と回答し、保護者はほぼ全員が「伝えて欲しい」と回答した。

**考察 1 3 —学校のルールや決まりを知りたいという保護者の要望に応えることは重要だが、どういった手段で伝えるかを工夫したい—**

保護者との連携を強めるためには、保護者のほぼ全員が望んでいる「学校のルールや決まりを家庭に伝える」ことは重要である。ただし、半数の児童生徒がそれを望んでいない。児童生徒を経由して伝えると、正しく伝わらない可能性もある。どのように保護者まで正しく情報を届かせるかについては、工夫が必要であると考えている。

## V. 教員のアンケート結果から

### 1. 児童生徒への指導

分析 1 4 — 「子どもたち自身がルールや決まりについて考える機会を設ける」「ルールや決まりについての学習を充実させる」については、他の指導より取組が少ない—

他の指導については90%以上の教員が取り組んでいるが、「子どもたちで考える機会を作る」と「ルールや決まりについての学習や授業を充実させる」については、両方とも約75%程度であった。

考察 1 4 — 今後「子どもたち自身に、ルールや決まりについて考えさせるような学習」を充実させたい—

※ 分析15の項目については、1人に対して2つまでの回答を求めた。

分析 1 5 — 効果的な指導は「重点化による同一歩調」と「毅然とした対応・姿勢」—

どのような指導が効果的かについては、「重点項目を決め、同一歩調で指導を推進すること」が最も多く、約59%であった。次いで「児童生徒の問題行動に対して毅然として対応する姿勢を明確にすること」が約48%であった。

考察 1 5 — 「重点化による同一歩調」の指導と「毅然とした対応・姿勢」の指導を徹底していきたい—

考察 5（「友達の悪口」「授業中のおしゃべり」「親や先生に従わない」のはいけないことだ、を徹底したい）、考察 7（規範意識醸成のために、①「公共心」を育てる②「責任感」を育てる③「コミュニケーション能力」を育てる、を重点としたい）を参考に、指導の重点化を図り、学校全体で推進するなどの取組が有効であると考えている。

### 2. 生徒指導上困ったこと

分析 1 6 — 生徒指導上困ったことは「家庭に関する内容」と「不登校や反社会的行動に対する指導」で、対処法は「繰り返しよく話し合う」こと—

生徒指導上困った経験の内容は「家庭に関する内容」が一番多い。具体的には、学校と保護者の考え方のギャップ、協力が得られない、指導内容へのクレームなどであった。

次に多いのが、「不登校、万引き、反社会的行動への指導」である。

どの項目でも、「よく話し合う」「わかるように話す」「繰り返し話して理解してもらった」と対処している場合が多かった。

考察 1 6 — 生徒指導に特効薬はなさそうである。「子どもをよくするために、繰り返しよく話し合う」ことを徹底したい—

### 3. 保護者や地域との連携

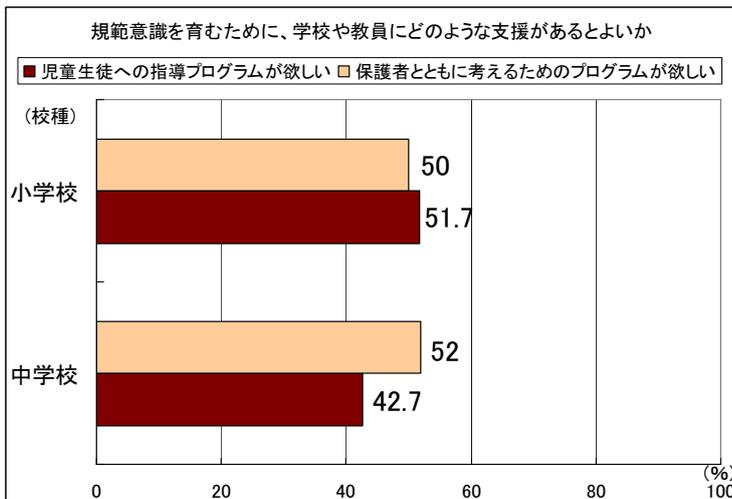
#### 分析 1 7 — 教員も保護者や地域との連携が必要であることを感じている —

約 40% の教員が「地域や保護者とともに『規範に沿った行動』について考え、解決策を探ること」が必要だと感じている。

#### 考察 1 7 — 教員も保護者も、「連携が必要」という方向性では一致していることを共通認識として、規範意識醸成の取組を推進したい —

多くの教員・保護者が連携の必要性を感じているということは、規範意識醸成の取組を推進する上で大きな力になると考える。

### 4. 学校や教員に対して、どのような支援があるとよいか



#### 分析 1 8 — 教員は児童生徒への指導プログラム、保護者とともに考えるためのプログラムを求めている —

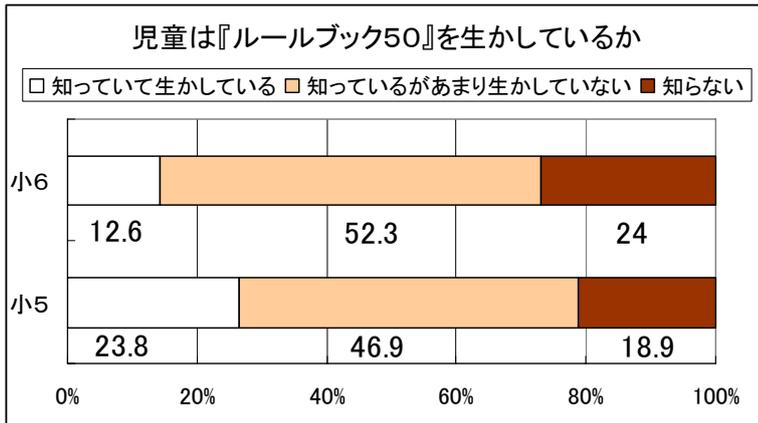
学校や教員に対しての支援については「学校と保護者がともに考えるようなプログラムがあるとよい」「道徳や特別活動などで使えるプログラムがあるとよい」というプログラムへの要望が高かった。

#### 考察 1 8 — 児童生徒自身がルールや決まりについて考えるような指導プログラムや、学校が保護者とともにルールや決まりについて考えるようなプログラムを開発し、提供していきたい —

考察 1（規範を守ろうとする大多数の児童生徒の力を活用）と、考察 1 4（子どもたち自身に、ルールや決まりについて考えさせるような学習）を考え合わせて、以下のようなプログラムを開発したい。

1. 話し合い活動や意見交換などを通して、児童生徒自身にルールや決まりについて考えさせることで規範意識を醸成するようなプログラム。
2. 学校と保護者、または保護者同士が児童生徒の規範意識などについて話し合ったりすることで、学校や保護者の連携を深め、同一歩調での指導を可能にするようなプログラム。

## Ⅵ. 『ぐんまの子どものためのルールブック50の活用』について

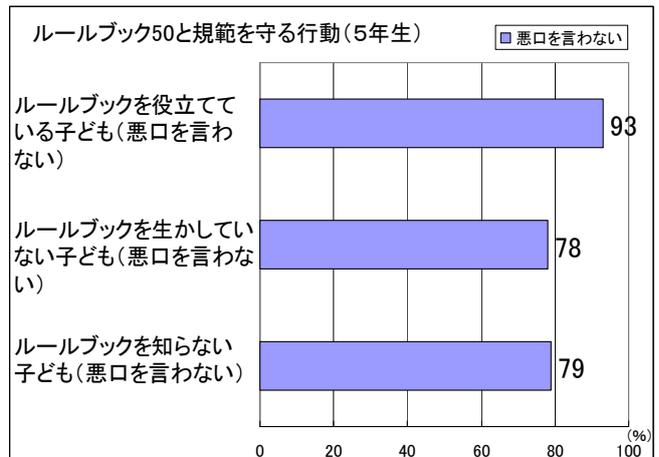
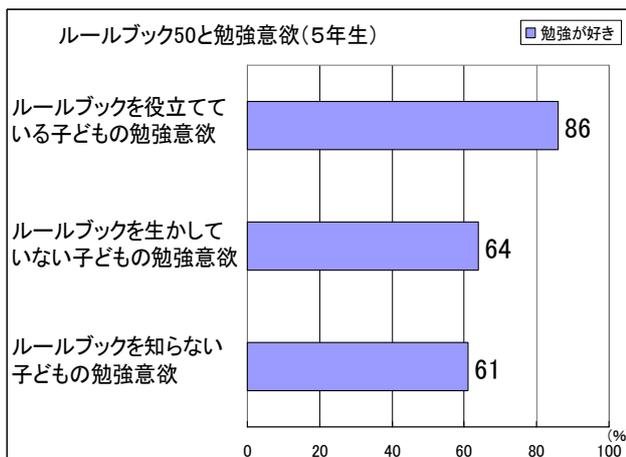


### 分析 19 — 『ルールブック50』に対する児童の認知度はまだ低い—

「ぐんまのこどものためのルールブック50」を知っていて生かしている児童は小学校5年生で約24%であるが、6年生では約13%であった。

### 考察 19 — 5年生・6年生で、『ルールブック50』を系統立てて活用したい—

6年生での取組を充実させたい。そのためにも「5年・6年で繰り返し指導する」又は「5年・6年で分けて指導する」等について学校で方針を定め、系統的に指導する体制が望まれる。



### 分析 20 — 『ルールブック50』を活用することは、規範意識醸成に役立つだけでなく、勉強に対する意欲を高める—

ルールブック50を「役立てている」と回答した5年生は、93%が「友達の悪口を言わないようにしている」と回答した。「生かしていない」5年生は78%、「知らない」5年生は79%だった。6年生についても同様の傾向が見られた。

ルールブック50を「役立てている」と回答した5年生は、86%が「勉強が好き」と回答した。「生かしていない」5年生は64%、「知らない」5年生は61%だった。

分析 20 — 具体的な活用例を参考にしたり、学級活動や特別活動の題材にしたりして『ルールブック50』を積極的に活用したい。また「規範意識醸成だけでなく、勉強に対する意欲も喚起する」ということを、保護者にもアピールして、協力を求めたい—